



佛國
李仙得氏
百



114
A 4400

甲号

拜見者昨夕御談話

儀

外務部

又三

御尋問

稿并同

在書并右

依

三條共

身被下

又府江御進呈被下候ハハ

一生進拜謝ノ至ニ御坐候元大

賢

御答書御進呈ノ日限相極候義ニ無之候得

更件ニ政府一日ニ忽ニスバカラサレ重事

御都合次第近出進御 奉願候尚只今

相関候層類教卷 者ハ為待是進



大正十一年四月

申候御定... 願候即存目錄相示申候... 御思召モ有之候ハ、諸省ノ内ヨリ見当ル差違
可申候謹言

一千八百七十四年

六月十八日在東京チャレスウラゼンドル印

書籍目録

第一 航海通史

第二 一千八百六十七年海軍卿報牘

第三 レーリーシヨン、ラゴライクス、ライスル、ホ
ルモサ、ヨリ、ラリ、モルニール

第四 一千八百七十二年キヨウシユル、キニダス
ツブ、ラフ、ホルモサ

第五 タクワシ、ツ、ウクストルシ、ユースト、ラフ、
ホルモサ、エーストル

ルモサ

第六 一千八百六十九年通商談

第七 一千八百七十一年通商談

第八 口ベルト、スワイネー、エー、台湾島、批答

第九 一千八百七十二年四月十七日、アモイ在

苗ノ米國領事ヨリ北京在苗ノ米國公使

口ノ唇簡

第十 ハッヤート、ノ、辭書

第十一 ホルモカア、シーセ、ウラ、レ、レイ、スト

第十二 シト、フル、ワ、ル、ロ、ス、ガ、ホルモカ

第十三 一千八百六十八年交際報一篇

第十四 スー、ヘル、ア、ト、ラ、ス、ド、ラ、キ、ヤ、イ、子、バ、ム、

テ、ア、ノ、イ、

第十五 尋問唇ハ、第二号、第三号、第四号、唇相

一、包

乙号

「アラルモサ」事件ニ付キ日本宰相局
ヨリノ問題ヘノ答詞

千八百七十四年六月廿五日認之

本月十八日「ゼ」子ラル、レ、ゼンドル氏ヨリ「アラル
モサ」ヘ送レル日本出兵ノ儀ニ管スル旨奏ニ付
キ予カ法律上ノ説ヲ得ント相談者ニタリ
右相談ヲ得ント求メタル大隈重信閣下ト「ゼ」子ラル、レ、
ゼンドル氏ト兩人ノ名前タリト虽モ「ゼ」子ラル、レ、
ゼンドル氏ヨリノ旨簡ノ文面(貴君此一件ニ

付キ唇面ヲ以テ貴君ノ説ヲ皇帝陛下ノ政府へ
述ヘ給ハシテ欲ス云々ニ付キ以テ之ヲ觀ル
時ハ予日本政府摠体ヨリ相談ヲ受ケタリト思
フ所ナリ

儲又此一大要件ニ付テハ其委任ヲ受ケタル政
府ノ各全權輩ノ中ニ於テモ縱令真ニ全ク其説
ヲ異ニセサルモ又互ニ少許ノ差異アルヲ免レ
サルカ如ク縱令予カ見込ト相談者ノ見込ト互ニ
異論アリト虽モ其相談者ノ極メテ公正ナル意志
ヨリニテ其論説ノ如何ヲ問ハス政府ノ各全權輩予カ見
込ヲ告知ニ結フニ相違ナレト信スル所ナリ

予カ相談ヲ受ケル各類ハ英語ニ之ヲ認シ其部
分左ノ如シ

第一 問題十箇

第二 米國法律學士「ベニーン」スミシカ右問

題へ 答詞

第三 「レゼンドル」氏カ右答詞へノ再答

予ハ右ノ問題ト並ニ右ノ答詞及ヒ返答トニ付キ
予カ説ヲ述フ可キノ相談ヲ受ケタリ

予ハ第二第三第五第六ノ問ノ如ク其文面ノ稍々
長キ問題ハ更ニ之ヲ写記スルヲ止メ又其問題

中此彼互ニ相解明スル者ハ之ヲ合シテ一トシ
而シテ又其問題ノ順序ハ予カ説ニテハ其宜シ
キヲ失スル者アルカ故ニ稍々其順序ヲ変ニタリ
例ヘハ第一ノ問ハ第四及ヒ第六ノ問ヲ解明シ
タルモノト思儼ス可ク道理上ニ就キ之ヲ言フ
時ハ其順序第三第五ノ問ノ後ニ来ル可キ
者タリ又其他ノ問モ変ニ之ヲ省約ニ其概略ヲ
摘撮スルヲ得可シ
前文述フル所ニ從ヒ十一箇ノ問題ノ数ヲ減シテ
五箇ト爲シ而シテ参考ヲ容易ナラシムル爲メ京昏ノ

番号ト紙面ノ数トヲ傍ヲ附記ス可シ

依テ今右五箇ノ問題ヲ吟味スルヲ左ノ如シ

○第一 「アタルモサ」蕃地ノ政治上ノ有様ハ如何、其
蕃地ハ其野蕃ノ有様ニ於テ不羈ノ者タリヤ又ハ緩許
歟、又那帝國ノ管轄ヲ受クル者タリヤ(右ハ「スミス」
氏ヘノ第四第六ノ問ナリ)

○第二 日本ノ圖計ノ種類ハ如何其圖計ハ千
八百六十七年ニ於ケル「アミラル」バロノ出兵ハ異
ナリヤ又「アミニル」ベルノ出兵ハ先例トナリシ
ニ非スヤ(右ハ第三第五ノ問ナリ)

○第三 米國公使「ゴンガ」氏ヨリ「セ」子「ラ」ル、
「レ」ゼント「ル」氏へ贈リ「シ」昏簡ノ本質ハ如何、其昏簡
ノ指揮ナリヤ又ハ助言ナリヤ、又日本、未タ支那ト交戦
セサル前且「ゴン」ガ「レ」氏ハ「セ」子「ラ」ル、レゼント「ル」氏未タ日
本出兵ノ兵籍ニ入りシ証ヲ得サル前ニ斯ク此支
ニ関涉スルノ権理ナリヤ(第一ノ問)
○第四 日本政府ノ「ゴ」ニウ「ヨ」ル「ク」艦ヲ僱入レタルハ
法ニ適フタルヤ又ハ此艦ヲ長崎ノ港内ニ引留ム
ルヲ得可キヤ又「ゴン」ガ「レ」氏此一事ニ関涉セシ
目的ハ如何(第七、第八、第九ノ問)

○第五 日本ノ米人ヲ「フ」アルモ「サ」ニ送ラント欲
スル意ハ萬國公法上及ヒ米國へ對セル禮儀上
ヨリ之ヲ論スル時ハ其本質如何(第十ノ問)又「レ」
ン「ガ」レ「レ」氏ヲシテ其決意ヲ棄テシメントスル爲
メ同氏ニ贈リ「レ」及向ノ書ハ當初如何ナル益ア
リヤ又今ニ於テ如何ナル益アリヤ
予ハ此五箇ノ問ニ答フル「ト」概略左ノ如シ
○第一 「フ」アルモ「サ」蕃地ノ政治上、有様ハ如何
其蕃地ハ其野蕃、有様ニ於テ不羈、者タリヤ
又ハ裁許放支那帝國ノ管轄ヲ受ケル者タリヤ

は八

(第四第六ノ問)

抑此問ヲ解スルハ他ノ問ヲ解スルニ先キ若シ
現ニ「ヲルモサ」ノ生蕃地(南及東ノ部分)全ク不
羈ナリト為サハ他ノ問ハ敢テ起ラサル可ク縱
令起ルヲアリモ甚ク疑ハシキヲナカル可ク因
テ今更ニ之ヲ言フニ「ヲルモサ」ノ生蕃地支那ノ
管轄ヲ受ケスト為サハ日本ノ出兵ヲ敢テ米國
ト親和スル國ヲ那ニ向ケ為シタル者ト思故ス
可ニス然ラハ又「ビニガ」ハ氏ノ關係モ唯々其理
ナキノミ、昨又明カニ害アル者ト稱ス可シ然

ルニ若シ生蕃地裁許カ支那ノ管轄ヲ受ケル者
ト為サハ他ノ問モ亦之ヲ解セサル可カラズニ
テ其困難亦頗ル大ナル可シ

「萬一」自カラ先ウ第四及第六ノ問ニ及ホシテ管
轄ノ事ヲ論シ(第二十五面ヨリ第三十三面ニ至ル)
第四号ニ至テ再ヒ簡畧之ヲ説キタリシカ(第五十五
面ヨリ第五十八面ニ至ル)此ニテ所共ニ全島支那ノ管
轄タルヲ支斷ニタリ然ルニ「セント」ハ氏ハ此管
轄ノ事ニ付キ許多ノ解明ヲ為シ同氏ノ旨趣ハ恰モ

此一事、在ルカ如ク「ミ」ノ説、又シ深ク歴史
及地理上ノ研究ヲ遂ク島中生蕃ノ地ハ全ク不羈
者タルヲ證明セントシタリ予願フ「ミ」氏ハ「ゼ
ンドル」氏ノ憑據トナス書類ニ注目セサル可ク且「ス
ミ」氏ハ其書類ヲ評論ニ能ハスト言ヘリ。
予ハ我予ニ右書類ヲ受取リタルエハ「ス」氏ト
同シク歴史及地理上ノ論理ヲ拋棄スルヲ得ス
「ゼンドル」氏ノ研究ノ精密ニメ且ツ博識ナルハ予カ
真ニ感服スル所ナリ
然レモ此相認ヲ受ケ「ミ」氏ノ重大トモ且フ答ヲ為ス可キ

時間甚々切迫ナレハ「ゼンドル」氏ノ研究スル所ヲ詳
細ニ取調フル能ハス然レモ其中重立タル箇條ヲ取
調一タル模様ニ據「ハ」セ「ド」ル「ミ」氏ノ憑據ト為ス歴史
及地理上ノ事柄ノ詳正ナルハ敢テ疑ヲ容レサル所ナリ
故ニ予ハ「ゼンドル」氏ト同シク支那ハ「フ」ル「モ」サ「ン」蕃地ヲ
現ニ確乎トシテ所有ニタリト述フ可カラス又支那ハ其
地ニ嘗テ一ノ永入ナル植民地ヲ設ケシ事ナク又其地ニ
開化ラ及ホシタル「ミ」キヲ言フ
然レモ縱令支那ノ尽力ハ是迄終ニ其功ヲ奏セシ「ミ」アラス
ト虽モ好機會ヲ覓ラ更ニ復タ其尽力ヲ為スノ意ヲ全

ク棄テタルノ證ナク又斯ノ如クタル可シト思料スル能ハサル可シ
若シ外國交際上ノ會議ニ於テ支那ノ「フルモサ」蕃
地ヲ管轄ス可キ名義如何ヲ吟味討論スル「アラハ其
名義ハ必ス不十分ノ者タル可シ然レモ此間ハ斯ノ
如ク真ノ法律上ノ着眼ヲ以テ為ス所ニ非ス此間モ
並ニ是レト相連接スル其他ノ間モ皆共ニ治術上ノ
本質アリテ相談人ノ意ヲ用ユル処ハ日本ヨリ「アラ
ルモサ」ニ兵ヲ送ルコトヨリ支那ト日本トノ間ニ戰鬪
ノ起ル可キ恐レニアリ此テ予ハ此着眼ヲ以テ論ス
ニ抑々「フルモサ」ノ地ハ支那ノ大陸ニ接近シ支那ノ

版圖廣大ナルニ比シテ僅々微小ナル一孤島ニ
過キ又且ツ島中ノ一部ハ既に現ニ支那ノ管轄タ
ルヲ以テ仮令支那ヨリ其蕃地ヲ已カ管轄ナリト
稱スルノ權ナシトモ亦之ヲ已レノ管轄トナス
ニ利アル可シ而シテ方今支那ニ於テ其蕃地ヲ服
従セシムルノ利ハ其蓄計ノ損費ニ及ハサルヲ
知ルト雖モ若シ他國人ノ來テ其蕃地ヲ服従セ
シメント為サハ支那ノ心情更ニ一變ス可ク殊
ニ日本ノ如キ一ノ強國人ノ來テ其蕃地ニ殖民
セハ其已レノ為メニ危リ訖中其既ニ管轄スル島

中ノ一部ヲ有ツ。：危害アル。是マテノ如ク其
番地ノ不羈ナル。：比スレハ更。：數倍タルヲ思
フ可シ

支那ハ方今ノ事情ニ於テハ敢テ其蕃地ヲ服從
セシメント欲セス又之ヲ欲スルハ怒クハ能ハ
サル可シ然レハ支那ハ他國ノ其蕃地ヲ征服ス
ルヲ妨制スルヲ自國安堵ノ爲メノ一利ト思フ
ベク而メ斯ノ如ク形狀ニ當テハ利ノ爲ニ憤發
ノ念ヲ生セシムル。：權ノ爲ニスルヨリ更ニ盛
ナリ又日本、於テモ航海者ヲルモ其ノ海岸ニ

漂着シテ土人ノ爲メ。殘酷ノ責直ニ逢フヲ防ク
ノ一利アリト爲サレハ敢テ其蕃地ヲ征服ス
ヘキノ托言アラリ可シ
前文述フル所ニ從ハ役令ヲルモサノ地ヲ以
テ役リ、居民無ク領主ナク最初來テ之ニ拠ル者
ノ所有ト爲ルヘキ地ナリト思ヒ做ス片ハ支那ノ
外國人其蕃地ニ占拠スルヲ妨クルノ托言ハ其
權ニ上ニ於テハ現今ヨリ更ニ其憑拠ナカル可
シト雖モ實事上ニ於テ自國安堵ノ主意ヲ以テ
論スレハ其托言ノ力有ルヲ更ニ現今ニ劣ラホ

ル可シト予カ思フ取ナリ。

今此第一ノ問ニ答フル其結末ヲ言フ支那政^府明白ナル康
諾ナクメ^モ多^ルモ^カ蕃地ノ征服ヲ目的ト爲シ兵ヲ出スハ米
國ト親和スル國^{支那}云^フ那^ラニ向ヒ戰ヲ起ス者ト見
做ス^トラ得ヘク因テ米國公使ノ此事、関涉ス
可キ權アル第一ノ基礎ハ是ニ於テ明カナレハ
次ニ同公使ノ處^ニ振リ、附キス^ニ又氏ト予ト
ヘノ其他ノ問ニ答ヘントス

○第二日本ノ國計ノ種類ハ如何、其國計ハ千八
百六十七年ニ於ル^アミ^ラル^ベル^レノ出兵トハ異

ナリヤ、又アミ^ラル^ベル^レノ出兵ハ先例トナリシ
ニ非ヌヤ

(右ハ第二第三第五ノ問ナリ)

抑ヌミス氏ト予トニ示シタル書類中、於テ第
四等、位ニ最モ^ニ難^クラ極ムル一箇ノ問ニ答フ
ル前、此三箇ノ問ニ答サルヲ得ス

先^ツ第一ニ考究スヘキハ日本ノ^モサ^ニ兵
ヲ送ル舉動敢テ戰ヲ爲ス^ニ非^ス平和ヲ事トスル者ト
为^カハ米國公使、之ニ関涉スルハ其理アル^ト無^シ
又第二ノ問ハ(第三十七回)去ル四月十八日附ノ^ビニ^ガ氏^ノ示

シタル覺書、松リ蓋と予ハ目下此覺書ヲ有セスト
虽ニ其文面ノ主意、就テハ敢テ争ヒアルヲ無カレ可シ
日本政府ハ都督ヲ派スル、就キニ箇ノ形状ア
ル可キヲ告知シタリ蓋シ其一ハ講和耐忍ニ在リ
又一ハ戦闘、在テゼ子ラールレセドハ講和耐
忍ノ舉、於テ都督ヲ補佐シ殊ニリテキントカッセ
ル及ヒワソニニ名ノカヲ及リテ島ノ東海岸ヲ
測量シボシタン地ノ近傍、於テ相當ナル船繋リノ
場取ヲ求メ出サントスルニ在リテ不意、襲撃ニ逢フ
豫備トシテ運送船、海兵五十人ヲ副フルノミ、

今試ニ問フ斯ノ如キ有様、於テ「ビニガム氏ノ論ハ
其理アリヤ否蓋シ此問、書類第三号(第四十五面)ニ記
スル所ノ日本ノ「カサ」ニ都督ヲ派出スル所置ハ
支那ニ向テ戦ヲ公布スルニ當レル者ト見做ス可キヤ否
ヤトノ問ニ同シ而シテ「スミス氏」ハ断然此問ニ答ヘ
テ支那ニ向テ戦ヲ公布スルニ當ルト云フト垂テ予ハ
之ト説ク同ウスル能ハス蓋シ都督ヲ派出スルハ
ニ箇ノ形状アルヲ告知シタルニ依リテ之ヲ考フハ
其第一ノ形状 講和耐忍ノ形状ヲ云フニ於テ必スニモ戦闘ノ所為
アルヲ見ルヲ頗ル難ク只僅ニ講和ノ設計始ヨリ破レ

ヲ頃ニ第ニノ形状戦鬪ノ形ニ轉ス可キノ恐レルニ過
キス然レ氏前ニ各ヲ記セル米國士官等ハ第一形
狀ノ職務ヲ任セテ其後ニ到リ必スモ第ニ形状
ノ職務ヲ任セラル可キノ証アラサルカ故ニ米國
公使ノ之ト関涉スルハ此着眼ヲ以テ論スレハ
餘リ早キニ過キタルカ如ク殊ニ此等ノ士官ニ
モサレテ赴クヲ禁スルノ本質アリト為サハ更ニ然
リ次ノ向ヲ參考ス可シ
都督ニ陪從ス可キ人負ハ襲撃ヲ為スニ是レ可シト
見ハサレハ覺書ニ記スル如ク防衛ノ本質アルノミ

ニ過キス

然レ氏相談人ノ云フ所第ニノ形状即チ兵ヲ以
テ壓服スルノ救テ支那ニ向テ戰鬪ノ所為ニア
ラスト論スル 第四ノ問過言ニシテ之ヲ主持
スル片ハ支那ノ權ヲ無ニスルノ害アリ既ニ相
談人ノ言ニ(第五十三面)若シ右様ノ圖計ヲ支那
ニ向テ戰鬪ノ所為ト見做サハ千八百六十七年
ニ於ケルアミラルベルノ出兵ハ米國議院ノ許
シヲ得スシテ之ヲ企テタル筈ナク殊ニ米國大
統領ノ稱讚ヲ受ケニ苦ナク而シテ支那ノ方ヨ

リハ必ス之ヲ論シタル可キ答ナリト云フ
スミス氏此三個ノ難問ニ答テ以テ之ヲ辯解ス
ル。左ノ詞(第五十五面ヨリ第五十八面ニ至ル)
ヲ用ヒタルハ予モ亦之ト同意スル所ニシテ今
之ヲ記スルニ(第一)アミラルベルハ其本國政府
ヨリ遠隔ノ地ニ在リテ自國人民ニ暴行ヲ加ヘ
シ土人ヲ断然懲罰スルノ任ヲ自ラ己レニ引受
ルヲ得ベシ(第二)大統領ハアミラルベルノ設
計ヲ稱讚セシニ非ス(其設計終ニ功ヲ奏サリ)
シニ由レハナリ同氏カ支那ノ政府ヲシテアラル

モサニ其实效アル管轄ヲ及サシメタル功ヲ稱
讚シタルナリ(第三)支那ノアミラルベルカ設計
ヲ論セサリシ所以ハ(或ハ支那ヨリ特ニ之ヲ許
セシヤ亦知ルニカラス)畢竟(第四)モサ島ニ永ク
台據スルノ恐アラサルニ依ルナリ
又支那ヨリアラルベルノ東及ヒ南ノ部分ハ己レ
ノ法律ヲ遵守セサル旨ヲ告ケタリト雖モ之ヲ
以テ其島中ノ此一部ヲ管轄スベシ權ヲ抛棄シ
メルモノト為ス可カニス畢竟支那ノ旨趣ハ土
人ノ行ヒシ兇惡ノ所為ニ付テノ責任ヲ免レ且

ツ自ラ之ヲ懲罰スルノ責任ヲ免セント欲スル
ニ在リ故ニ予カ思フ所ニテハ縱令現今支那ヨ
リ日本へ右様ノ旨ヲ告リルル亦其意ヲ解スル
トト同シカル可シ

又支那ト日本トノ條約書中ニ苟モ他ノ各國ニ
許ルズ特權ハ敢テ亦日本ニ之ヲ許ルサ、ルナ
カル可キノ文ヲ記入シタルハ「マミラル、ベル」ニ
出兵ヲ許シタルハ亦日本ニ出兵ヲ許ルズ可キ
ノ先例ト為ス可キ「ニ付キ相談人ト同意」可
キヤ(第五ノ問第五十九面)

予忠(「テ」支那ヨリ「テ」ミラル、ベルニ許シタル
所ハ條約書ニ載スル特權ノ如キ本質アル者
非ス抑條約書ニ記スル特權ハ兩國互ニ相交ハ
ルニ付テ「永」ノ權利ヲ云フ「在」テ一時已
ムヲ得ス偶然起リシ特別ノ目的ノ為メ「外國
ノ人民ニ兵ヲ率ヒテ支那ノ領地内ニ入ル」容
ル「臨機」ノ許諾ハ前ニ云フ所ノ特權ト同視ス
可シ「ニ」サル者ナリ

○第三 米國公使「ヒ」ガム「氏」ヨリ「ゼ」子「ラー」ル
「レ」ゼン「ドル」へ贈リシ書翰ノ本質ハ如何其書

翰ハ指揮ナリヤ又ハ勅言ナリヤ又日本ノ未々
支那ト交戦セサル前且ル「ビシガ」氏ハ「セ」子ラ
「ル」ゼンドルカ未々日本出兵ハ兵籍ニ入り
ミテ得サル前ニ斯ク此事ニ関涉スルノ權理
アリヤ(第一ノ問)

「ル」モサ島政治上ノ最重要ナル問ニ次キ此ニ
記スル所ノ問ヲ以テ頗ル重要ニシ且困難ヲ
極ムル者トス又此問ハ書類中第一ノ問タリ
因テ今此問ニ「ル」為メ之ヲ分ツテ左ノ事件
ト為ラ必要トス

付十九

第一 「ビシガ」氏ノ書翰ハ如何

第二 其問涉ハ其理アリヤ如何

第一 「ビシガ」氏ノ書翰ハ「レ」ゼン「レ」氏ニ「ラ」

ルモサ「レ」蕃地ニ赴クヲ禁スル指揮ナリト看做ス
可キヤ如何

抑 指揮ト勅言トノ中間ノ本質アル書面ハ通

言詞ヲ以テ之ヲ記シ之ヲ定ムルヨリモ意

中ニ之ヲ解スル「レ」更ニ容易ナル者トス而シテ「レ」
「ガ」氏ノ書翰ハ即チ此中間混合ノ本質アル

者ニシテ(此書翰重大ノ者タレハ予其文面通り
之ヲ写記セサル可カラスト思フ所ナリ△号ノ
書面ノ参考ス可シ)其書翰ノ文詞ハ全ク指揮ノ
詞ニアラス而メ又固トヨリ助言ノ詞ニモアラ
其書翰ノ短キト丁尊慈懇ノ詞ナキトニ因テ
通常助言ノ意ナキト明カニシテ而メ又バチフア
イニウレ^ルスル^ル連ト云ヘル語ノ義意ニ^ニグニフアイ、
ツ^ニユウ^ル命^ニト云ヘル語ニ比スルハ稍々輕シ
ト雖モ通常助^ヲ為スニ用フル言詞ニ非ス此
常助言ヲ為スニハラツラ^ル助言ト云ヘル^ル

用^ルナリ^{ハ十九}

予思ヘラク指^ト加キ詞^ア
ノ如キ詞^ア
又ハ^ハ
又^ハ
シタルハ偶^ガト氏ノ斯ク中間温和^ヲ擇用
レゼン^ドル^氏ニ^ニアラサル^ト明カ^ニシテ同氏ハ
或ハ^ハ禁スル言^ヲル^ニ徒ラ^ニ或ハ指^令シ
シラ^ニフ^ルナ^ルシ^ク
シ^ク欲^スア^ラシ^ク
意^助

味最モ強ノ言詞

ノ責ヲ負ハズ

ラス而メ公使

可キ權アル

シナラン

後ニ相

ハ蓋シ其論理ハ右書

センドル氏ハ更ニ後ノ助言ヲ受取

ス可カラストハルヲ以テ之ヲ知ル可ク今此

文面ニ就キ以テ之ヲ觀ル時ハ右ノ書翰ハ

最初ノ助言タルヲ明シテ若シ之ヲサ

非スト為サハ更ニ後ノ助言ト云フノ理ナカ

可シ又此更ニ後ノ助言ハ米國公使一人ノ為ス

ニ非ツ日本政府及ヒ米國政府ノ之ヲ為ス

奇キモノナリト是ニ因テ此ヲ觀ルハ「ボンガム」

氏ハ一人ニテ右書翰ノ結末ヲ決定ス可キ權ア

リト思フタルニ非ス且ツ同氏ハ一人ニテ敢テ

「センドル」氏ニ制禁ノ指揮ヲ為シ得サルノ一証ナリ

故ニ「スミス」氏ハ第三問ノ第一項ニ付キ「ボンガム」

氏ノ書翰ハ指揮ノ本質アリト云フト雖モ予ハ

「ボンガム」氏ニ非ス

「スミス」氏ニ非ス

「センドル」氏ニ非ス

「ボンガム」氏ニ非ス

「スミス」氏ニ非ス

「センドル」氏ニ非ス

「ボンガム」氏ニ非ス

「スミス」氏ニ非ス

敢テ之ト同意セス

此ニ又注意ス可キ一事アリテ是レ蓋シ右「ビン

ガム」氏ノ書翰ニハ這回ノ問題ニ記スル所ヲ如

ク載テ「アヲル」モ「島中ノ各部ヲ差別セリル」

リ然レモ右書翰ニ特ニ都督派出ノ無ニ「目

的タル生蕃地ニ着眼シタル」明ナリ

一「ビンガム」氏ハ「甲」日本ノ士 夫那ト文戦

セサル前「丁」且ツ「レ」ゼンドル氏ノ未タ出兵ノ海

陸軍兵籍ニ入リシ証ヲ得サル前ニ右様ノ皆「レ」

ヲ為ス可キノ権アリヤ

「甲」日本ノ當時既ニ夫那ト文戦スル事否

ヲ定ムル事ニ付テハ前文ニ之レヲ記シ

ル如ク「ス」氏ハ然リト答ヘ「第三号」茅

四十五」予ハ第一号ニ「不」ト答ヘ「前

文」第十四面故ニ予カ説ニテハ「ビンガム」氏ノ

日本トノ文際ノミ「着眼」シテ以テ論スレハ

同氏ノ處置餘リ早キニ過キ又日本ニ

「計」ビンガム」氏ニ其関涉ノ権理アルヤ否ノ

事及ヒ其関涉ノ時宜ニ適シタルヤ否

ノ事ハ「第四」及ヒ「第五」ノ所ニ之レヲ

裁定セントス(書類第八、第九、第十、第十一ノ間)

モ「ベンガムノ「ゼンドル氏」對シテ右関涉ヲ為ス可キ権理ノ有無ニ付テハ予其本案ヲ裁定スル前ニ其関涉ハ必スモ「ゼンドル氏」ノ現ニ兵籍ニ入りタルニ管スル所ニ非サル旨ヲ述フ

「ベンガム氏」法律ニ適合シタル抑留ヲ為スニハ「ゼンドル氏」現ニ兵籍ニ入りレヲ必要ト為スト雖モ後文ヲ参考ス可シ前ニ記セシ如ク「ゼ

「ゼンドル氏」ノ「フナルモヤ」ニ赴クヲ止ムルニ「ベンガム氏」米國ノ法律ニテ嚴ニ禁セス且頗ル歎息ス可シト思ヘル事ヲ未然ニ預防スルハ甚タ理ニ適ヘル處置ト云フ可シ
本ノ次第ニ付キ若シ「ゼンドル氏」現ニ兵籍ニ入りタルハ公使其兵籍ヲ脱スルノ勸ム可ク若シ未タ兵籍ニ入ラサレハ終ニ之ニ入ラサルヲ勸ム可シ又政府ニ於テ其臣民ノ他國ノ兵籍ニ入ルヲ制スルノ權アレハ其現ニ兵籍ニ入りタル前後ヲ問フナク殊ニ其制禁ノ效アルハ現

ニ兵籍ニ入リ。レ前。タルベシ而メ一旦兵籍ニ入
リタル後ニ於テハ之ヲ制スル者ノ為メニモ制
セラル、者ノ為メニモ甚タ不都合ナル強逼ノ
處置ヲ為サ、ル可カラス然ル時ハ其制禁ノ効
ヲ生セシハル常ニ甚タ難シ

又「ビンガム氏ノ處置ハ之ヲ指揮ト思做スル或
ハ之ヲ助言ト思做スル其法律ニ適合シタルヤ
否ノ一大重要箇條ヲ左ニ吟味セントス

「スミス氏ハ「ビンガム氏ノ處置ヲ指揮ナリト看
做シ而シテ其説ノ初メニ権理上ノ論ハ日本政府

ヘ對シテ之ヲ言フヤ又「ビンガム氏ヘ對シ
テ之ヲ言フヤ若シクハ米國政府ヘ對シテ之ヲ
言フヤ分明ニラスト云ヘリ

予ハ米國政府ヘ對スルノ論ハ日本政府又ハ「レ
ゼンドル氏ヘ對スルノ論ト其實敢テ異ナラス
ト思ヘリ而シテ其所以ヲ言フニ若シ「ビンガム氏
本國政府ヘ對シ前ニ記スル處置ヲ為ス可キノ
權ヲシトセバ「レゼンドル氏及メ日本政府ヘ對
シテハ猶更其權ヲカル可ク又「レゼンドル氏ト
日本政府トヘ對シテ其權ヲシトセハ本國政府

一 對シテモ亦同様其權ヲカル可キノ理ニシテ
若シ本國政府へ對シ其權アリテ「ゼン」ドル氏
へ對シテ其權ヲシトスルニハ「ゼン」ガム氏特ニ
此事ニ付キ已レニ責任ヲ負ハス本國政府ニ其
責任ヲ負ハシムベキノ別段ノ差圖書ヲ本國政
府ヨリ受ケサル可カラ然ルニ予今現ニ此一
事ニ付テハ敢テ此ノ如キ本國政府ノ差圖書ア
ルヲ知ラサルナリ

余ノ所考ニ依ンハ此件於テ尚「ゼン」ガム氏此
ニ權ヲ有シ彼ニ有セザル理ニテ之ヲ允スル能
ハス因テ茲ニ二箇ノ要件ヲ合併シテ論ス可シ
加之余ノ希望スルハ「ゼン」ガム氏ノ人民ニ於ル
反對禁止ノ權ヲ有スル能ハサルヲ証シ且同氏
ノ所置綴大ナルト認ル時ハ是則公使ノ所意ナ
ル可キニ決セリト思ヘリ
該件ニ至リテ「スミス」氏ト余ノ論議ト不合ナルハ
判然タリ

○第一日本政府或ハ「ヤ」子「ラー」ルニ對シ「亞」國公

使ノ禁止ノ權ヲ有セサルハ一千八百五十八年
七月廿九日合衆國日本ト結シ條約中ニ明亮ナ
リ
スミス氏ノ引用シタル此條約十葉及十一葉上亞國ニ
於テ日本政府學術技藝ニ関スル國人及ヒ海陸
人負テ傭イ得可シトアリ然海陸人負ノ件ニ於
ル若シ日本國ヨリ合衆國和親ヲ結タル一國ト
戰ヲ開タル時ハ此條約ヲ不踐トアリ
スミス氏自ラ己ニ此特約ハ戦争前日本政府ノ
傭シ亞人ニ適ス可カラザルヲ言ヘリ

加之ニ該條約ハ合衆國人民其國內ニ在ル者ヲ
傭入ルニ適シ將タ日本國ニ於テ他ニ関ンヤス
亞人ヲ諸邦ヨリ傭セ得ヘク殊更日本國ニ於テハ
假令戦争開タリトモ更ニ妨碍ナクハスミス氏
ニ同論ナル可シ
スミス氏此要件ニ於ル第十葉亞國ト和親ヲ結
ビタル字句兩國一千八百七十年戦争間亞人ノ
兩軍ニ從斐シタル教証ヲ掲ケ亞人ノ兩國
ニ在シ者本國人更ニ之ヲ答メス其政
府ニ於ル亦其責ニ任ゼス是則チ其國人

仏或ハ字國內ニ於テ從夏之亞國地内ニア
ラサルヲ以テナリ

此判然タル區別ハ「スミッス」氏已ニ亮解セリト雖
モ「ベンガム」氏ノ所置至當ニコレ其禁止ノ權ヲ
有スルトセリ

雖然「スミッス」氏「ベンガム」氏論スル僅ニ合衆國
特異ノ國法ヲ以テセリ

○第二「スミッス」氏説明スル所ノ一千八百十八
年四月二十日ノ國法ハ同氏モ余モ之ヲ採引セ
ス此法和親ヲ結ビタル一國ニ對シ戦争間之ニ從

夏スル昔ハ嚴刑ニ処スト雖然是只合衆國審
判權利ヲ有スル所ニ於テ而已論セシテ則第一
ハ亞國陸地第二ハ亞國一時兵隊ヲ配置スル地
第三ハ大洋中亞國所轄ノ船艦ヲ云フ

然ト雖モ亞國局外地法ニ準シ合衆國審判
ノ權ヲ日本開港場ニ及ボスハ頗ル疑ヲ容
ル可シ或

「スミッス」氏所論ノ如ク此國法ハ地方律ニシテ
外國居留ノ國人ニ施シ得可カラス此レ他ナ
シ一箇ノ特異ノ律アルヲ以テナリ

全ク「スミス」氏議中左ノ一受ヲ流フニ若シ
人アリ此國法ヲ他ニ解センニ其意殊ニ
過ニ至ラン其理ハ局外地方律不定ノ東
邦諸國ニ於ル外國領事其所轄國人
審判ノ權利ヲ有シ殊更貿易上諸交
換案件及ヒ民法諸事 諸條約書
等ニ関スルヲ以テナリ

該件ニ至ルマテ「ビンガ」氏所置一千八百
五十八年條約中及ヒ一千八百十八年
亞國國法間々不當ナリトノ論ハ「ス

ミス」氏余ト全ク同見タリ

○第三 「スミス」氏一千八百六十年

新定國法内一條ヲ掲ケ原文同氏ノ唇タ

ル左ノ如シ第十葉然リト虽モ此國法タ

ル東邦西國在 當公使ノ特權ヲ張

ラシメンカ 為ニシテ 諸命令ニヨリ

禁止スルタメニ諸種ノ書付ヲ出シ 亞國ト和親ヲ結ビタル

外國ニ對シ海陸戰爭事件ニ関

スル亞人ニ告諭スル者ニシテ如ル

ニ該國公使其國人不服ノ者ハ勢力

以テ之ヲ禁止スルノ權アラハ(合衆國屬スル兵隊ノ最寄ニ
アルモノヲ用ヒテ其勢ヲ張ルヘシ)

此法ハ亞國人ノ可忌諱難事ニ至ルヲ預メ防ニ
アリ

一千八百六十年新定國法中一千八百十八年ノ

眾狀ヲ西ニ揭示セサル時亞國人他國ニ備ワル

地方ノ辨解ナキヲ以テ之ヲ導奉シ難ニ至ラン

且一千八百五十八年約局中ノ如ク若シ亞人外

國ト已ニ約ヲ結タル者ノ處置ヲ欠リ

一千八百六十年ノ新定國律ニ原キ亞國公使ノ

為メ不都合ヲ生セサラシメント欲スルヲ以テ

スミツス 氏法權ノ本源則各個ノ權利及萬國公
法兩義ニ関スルヲ置テ不論ニ似タリ

亞國日本ト友誼ヲ修スルヤ實ニ一千八百五十
八年ニ在リ此條約ハ則他諸約ト全シク互ニ協
議ノ上ナラデハ變革シ不能者ナリト虽モ日本
政府ニ於ル一千八百六十年ノ一大變革ヲ不知
ラ以テ戰爭先備タル亞人ヲ今回ノ役ニ從事セ
シメレハ至當ナリ

加之一千八百六十年ノ國法ハ其前已ニ約ヲ
結テ外國ニ服役スル確定權利ニ更ニ障礙ナシ

其理ハ此件已ニ過去ニ屬シ且十分ノ理ヲ具ス
ルヲ以テナリ

故ヲ以テ一千八百六十年前定約ノ確乎タルハ
不待論ト虽モ猶茲ニ一ノ決議ヲ掲テ以證セン
該國入其自國所禁ノ國法ヲ預メ報知アリト虽
モ若之ニ反レ國人ノ咎ヲ不省戰爭間外國ニ服
役センニハ日本國所利ノ條約ニ反レ國人結約
自由ノ權ヲ奪フ不能將日本國戰爭事件アラサル
前 結約スヘキ權利ヲ有シ且其人アリテ始テ
其約ヲ結カ故ニ到底自然且頂要ノ各個ノ權ヲ

以テ亞人ノ所利日本政府所有ノ權利ニ依テ保
護セラル、ニ至ル可シ一人アリ其頭目ニ對權
ヲ不有ト虽他却テ之ヲ有セシムル等ノ事件ハ
毎回ニシテ恠ムニ不足羅馬裁判事件中屢之ヲ
用ヒ法權ノ一證ト成セリ法ノ要訣曰ク邑ニ由リ得ヘカラサルモノヲ人ニ
由リ之ヲ得ルヲ常ニコレナリ。
今茲ニ概論センニ合衆國日本政府戰爭前備入
タル亞人ヲ此回事件ニ用ユルヲ禁スルノ權絶
無ニシテ若人民ヲ物件ニ較シテ論センニハ則
武器玉藥軍艦等他ノ目的ナク戰爭前ニ購求シ
タルヲ後來ニテ用ルヲ還サシムルニ全シ

余故ヲ以テビンガム氏所置若一個ノ命令ナル
時ハ日本政府及ヒジエ子ストールニジュントルニ對
シ不當トナス可シ之ニ反シ一ノ公然タル告諭
ヲラシニハ唯日本ニ對シ交際上親疎厚薄且公
使及ヒ其國人間政務上ニ衡シタル事件ノ弁論
ニ歸ス

最終弁論議ハ乃チ次ノ諸件ニシテ

後ニツク

第四

日本政府ニウヨル船ヲ装シタルハ理ニ適スル
 ヤ此船ヲ長崎港ニ抑留シカハ能フヤビンガム
 氏如何ナル所置ヲナス可キヤ第ニ葉第九ノ疑
 ビンガム氏ノレシヤレハ氏ヲ禁止セシハ理
 ニ不合ヲ論セシ件長崎港ニ於テニウヨル船
 ヲ強テ抑留シタル全ク其理ニ不適ヲ確定スヘ
 シビンガム氏ノ所置果
 スニツス氏此件ニ付第八疑問ニ答エシ第十四葉 論議ハ
 如左日本國一千八百五十二年條約ニ原キ人民

同様船艦ヲ装シ得ヘシト云モ若シ該所戦争生
スル時ハ亞國地内及ヒ海上ニ於テ之ヲ行フヲ
得ス其理ハ船主其所好ニヨリ戦争間之ヲ行フ
ヲ以テ其政府保護ヲ依頼スヘカラザルヲ以テ
ナリ然ト云モ之ヲ以テ日本或ハ亞人ノ法ヲ侵
シタルヤハ認メ難シ
一千八百六十年新法ハ其一日本政府ノアル時
ハ結約ノ者ノ權利ヲ奪不能
亞人ヲ亞國外ニ於テ傭ノ所ノ權利全ク船艦装
置ニ適スヘシ

余スミツス氏ト今シク戦争間亞船傭ノ事
ヲ始ルカ為ニ装置スルノ區別ヲ論セシ第一ハ
領海外ハ無害ナリ此件ハ條約書中ヨリ採用シタ
ルニシテ元ヨリ法ニ戻ルト認得ヘシ
其他附屬書中ニ依ル第一日本政府命令ヲ以テ
該船ヲ止メニシテ此件ハ只ニ想像事件ニシテ且
日本政府此命令ヲ不出時ニ關係ス
日本政府ノ此件ニ於ル抑物議ヲ不生ヲ歎ニ出
シヤ余ニ於テ之ヲ論議シ難ク且之ヲ為シ不可得
ピンガム氏所置ノ件ハ日本政府ニ於テ更ニ不

良ノ意アルニアラス且今氏ノ所志至當ト言フ
可ヲ弁解スルハ容易ナリ

今茲ニ一般ノ論議ヲ再ヒナサンニスミツス氏
弁明スル所ノ件 茲ニ至テハ余ト全ク同

論ニシテ第ハ十三葉 合衆國支那ト和親ヲ結ビ

シハ日本ト殆ニ同時ニシテ一千八百五十八

年條約ヲ以テ該國已ニ支那ニ向テ戦ハントナ

セシヲ止メ勉テ平穩ニ赴ト約セリ

約中不正或ハ壓服ノ件ヲ載^載リハミツス氏之ヲ

不舉^不直然和親ヲ結ヒシ國ノ平穩ノ所置 人ノ

最モ好ム所ニシテ戦端ヲ開キシ國ノ正 有

スル者ニ於テハ愈甚^甚効ヲ奏ス可シ

トシガム氏此ヨリ戦争ヲ生スル時ハ其正理ニ

適スル論議ヲ預メ裁スルニアラガルニ似タリ

今氏僅ニ戦争ヲ生スル西國間ニ預メ其先且其

所意ヲ以テ論議シ不能ク將タ西國船艦及ヒ戦

士ノ日本軍隊中ニ所スルハ其自國平穩ノ所置

ヲ表スルハ至テ難ク且之ヲ消スルニ至ルニ注

意スルハ元ヨリ至當ナル可シ

如此ノ所置ハトシガム氏ニ本ニ對シ 實^更ニ論ス

ル所ナリ今氏ノ所置ヲ命令ト不認一ノ告諭ト
ナス時ハ亞國公使ノ所意ヨリ出タラント考工
得ヘシ

故ニ余先ニ此件ハビンガム氏ノ告諭ナル可キ
ニ帰ヤシト言ヘリ

第五

日本國ヨリ台灣ニ亞人ヲ送ルヲ固持スルニ於
テハ万國公法上及ヒ亞國ト交際上如何ナル景
況ニ赴リヤビンガム氏ニ抗スル論議ヲ以テ全
氏ヲ之ヲ吾所論ニ後ハ之ムハ須要ナル
第十

一疑

日本政府無人及ヒ亞船傭入ニ於テ其十分ノ權
利アルヲ己ニ説明セリ故ヲ以テ該政府万國公
法諸則ニ不戾將亞國ニ對シ更ニ其責ニ任スル
トナリビンガム氏ノ所置ニ不関シテ至当ナル
ハ不待論

若如此行ハレシニハ交際上規則ニ觸ルヤ否ハ
一疑問アラシニハ日本國幸福ヲ現ニ希望親睦
ノ外國官吏ニ預メ協議セスシテ直ニ之ヲ行ニ
今日ノ論議不合ニ至リシハ交際上規則ニ觸レ

カルトハ難言

ビンカム氏ノ論ニ抗スル一議ヲ起シ或ハ日本
政府ヨリ他ノ一理ヲ同氏ニ與シテ以テ之ヲ起
得ニ至ラサリシヤノ疑問ニ於ル疑問者返テス
ミツス氏及ビ余ヨリビンカム氏所置ノ結末及
ビ此中日本國ニシテ少ヨルク船ヲ用サルニ至リシ
事情ハ必ラス明亮ニシテ此事件日本ヨリ全氏
ニ與ル所已ニ大ニシテ後來抗抵論ヲ發起シ能
クサル可シ

其他余ノ所見ニハ假令談論ヲ出ストモビン

カム氏ノ重人ノ出途ヲ支タル所意ヲ変セシメ
シハ甚タ難ク如何トナレハ其國人ニ命令ヲ全
氏ヨリ不出トモモ十分ノ意見ヲ陳述シタルヲ
以テヨリ全氏ノ談論ニ與スル時ハ自己ノ名義ヲ
缺サルヲ不得ヲ以テナリ

故ニビンカム氏ノ所為ヲ変セシムルハ互ニ温
和ノ會議ヲ以テ之ヲ吾所望ニ導クニアリシ方
今猶此件行ツル可ク恐クハ己ニ之ニ及ヒシナラン
余ノ所見スミツス氏ト不合重大事件ニ簡ニシテ其他尚ニ簡
ノ事件同論ナラサルヲ以テ茲ニ概論スヘキハ須要ナリト思ヒ

第一臺灣ノ地タル支那ニ全不隸ト認不得ハス
ミツス氏ト同論ニシテ允支那國所有ノ天理ヲ
不論只全國ノ依テ以テ論スル所ヲ云フ
其他支那國ニ於テ該島ヲ真ニ隸シ或ハ之ヲ鎮
スルト唱フルハ不服ニシテ己ニ之ヲ試^試シト云
モ實効ヲ奏スルニ不至ハレシニドル氏モ余モ
熟知スル所ナリ

至当理上ヨリ論セシハ支那國ノ依リ以テ主
張スル所十分ナラス余ハ只方今事勢ノ疑問ニ
答ルハミニシテ日本今回ノ挙支那如何ノ理ヲ

以テ處置スルヤ將其待スル處真ナルカ是亦余
ノ置テ論セサル所ナリ

前条意志ヲ以テ云ハンニハ諛島野蠻ノ部分ヲ
開カント欲セシ支那國ノ此島ニカテ致セシハ後來全島
ヲ占領スル所意暗ニ其内ニ寓セリ其他兩國ノ形状
及台湾ノ幅員ヲ以テ論センニハ尙來支那所屬タル
ニ至ル可シ故ニ若他國ノ該島一部ヲ領スルノ舉
リト雖モ之ニ関セス預メ其先ヲ着スルヲ不勉
ヲ以テ支那先占ノ權利ヲ得ストイ
ハドモ尙來ニイタリ其平治ノ禱

益及之保護ヲ以テ之ニ代テ論スヘシ

第二 第二條ニ於ル余ノ所考亦スミツス氏

ト同シクニ回ノ使節派出ノ策ハ恐クハ支那ト

ノ争端ヲ開クニ至ルベシ 第一回ハ和議ヲ主トシ
第二回直ニ戰使ヲ送

ルニ轉ス

若然ラレニハ第二條ノ件ハアドシテールベール

氏ノ挙ト其情実ヲ異ニセリ其理ハ彼ハ支那國

ヨリ其シテ與ユル許可アルヲ以テナリ其事情

ニ差ラ宝スルヲ以テ支那ト和親ヲ結タル國使

ビシガム氏ノ初志ヲ覆ヒシムルニ至ル可シ

第三 ビシガム氏ヨリビエ子ラールレジュント

ル氏ニ送りシ台湾行ヲ止メシ書ハ一ノ命令ナ

ルヤノ条ハ余ニ於テハスミツス氏ニ反シレビエ

ンドル氏ヲ支ユル公然タル告諭ニシテビシガ

ム氏自ラ其責ニ任セスシテ命令ト一般ノ理ニ

至ランヲ希望セシハ判然タリ

第五 ビシガム氏日本備人ノ國人或ハニウヨ

ルケ船ノ發程ヲ止ムル令ヲ行フ權ノ有無スニ

ツス氏ハ之ヲ一千八百六十年並國法ニ照スト

虽モ余ニ於テハ此國法ハ一千八百五十八年條

約、不反只亞國集會上件ナルヲ以テ之ニ依テ
交際上條約ヲ變シ能ハス。

其他ノ諸件ニ於ルスニワズ氏ト其意ヲ合スル
アリ或ハ余ノ他見ヲ以テ已ニ前ニ陳述スル如
ク其旨遂ニ一ニ歸スルアリ

第一ニウヨルク船長崎港ニ於テ抑留ノ理ニ
合セザル條是日本政府ヨリ其令
アラサシ時ヲ云フ

第二ニビンガム氏所考ノ諸件且余ノ所見ヲ添テ
タル條

第三ニ萬國公法ニ原キ日本政府ビンガム氏反

對ニ不問所置シ得ヘキ條

第四ニ日本交際上變革有無ノ條

第五ニ反對論ヲナサシニハ如何ナル形此ニ至リシ
カ將タ至ル可キヤノ件

日本國已ニ開キシ戰爭ノ利害得失將該國尙來不利ヲ生スル等
敢テ余ノ論スル所ナラスト。虽モ只ビンガム氏所置ノ依テ来ル所以ヲ陳述
スベシ

二箇ノ疑問^{第七及第八條}已ニ各々如クビンガム氏舉ハスミット氏ノ至當ノ論ニ異
ナラスト。虽モ此重大事件ノ書類調査ヨリ余ノ見出タル論議ヲ述
ビンカム氏獨支那裨益ノ為ニ此舉ヲナセシニ
アラス多少日本國ノ為ニシテ或ハ其志ス所支

邦交際ノ上ニ出ルモ知ル可カラス
今氏日本國自的^目他ニ轉シ且其銳意所行ノ國內
沿革ノ漸次全備ニ至ルヘキ時弊ヲ変スルヲ深
ク苦心シレシユンドレ氏ノ所置ニ依テ合衆國及
其他各國今回日本ノ舉ニ左祖セサルヲ証スル
旨趣ナレハ今更ニ疑ヲ不容處ナリ
其他ヒンカム氏已ニ數年未ヨリ垂國裨益ニ涉
ル盟約ヲ東邦ニ大帝國間隙ヲ生シ戦ニ苦マシ
ヲ熟圖セシナル可シ此亦世界中一大國使官ノ
職務ニ於テ日本ヲ裨益スルニ於テ於テ至當至公

ト云フベシ

日本政府此舉ノ為メ各國へ布達スル所ノ件ハ
元ヨリ至當ナリト虫モ勉メテ能ク敦密切實ニ
所置ニ且台湾島ニ對シ東邦諸國ニ涉ル外國裨
益ヲ妨害ナキ様其推利ヲ得ルノ方法ニ熟慮セ
シラ知ラシニハ外國亦其所希ニ從フハ無論ニ
シテ且歐米ニ州ノ日本ヲ視ル昔日ニ勝ル可シ
日本若他法ヲ以テ所置アラシニハビンガム氏
シノ尚一層ノ懇切ヲ顯スニ至ラシム可シト虫
モ台湾日本ノ景况情實ニ於テ不腹ナルハ實ニ

日本ニ對シ惡意アルニアテサルハ判然タリ

江戸ニ於テ一千八百七十四年六月二十五日

ヂ、ボウアソトードドホシダラゼエ

巴理^シニ律大^シ学校教師

司法省附法律師

丙子

「フル」モサ島ノ事ニ付キ追加問

題ノ答詞

第十ニ問

凡ソ開化ノ及ハサル島國ノ人民其海岸ニ漂着セル船ノ乗組人ニ向テ殘酷ノ處置ヲ為ス^テ數回ニ及^テ之^ト接近セシ甲國ニ於テ其島國ヲ開化セシム可キカアルニ^テ敢テ之ヲ為ス^テラ適宜ナリト思ハサル時ハ其島人ノ為メ殘酷ノ取扱ヒヲ受ケタルニ因リ斯クノ如キ事ノ更ニ生スルヲ防制スルニ最大ノ管係アル乙國ハ甲國ノ

其蕃夷ヲ開化セシムルヲ肯セサルノ証ヲ得タ
ル上ニテ能カラ其蕃夷ヲ開化セシムルニ必要
ナル處置ヲ為スル万国ノ公法ニ反キタルヤ否
抑此問ノ如キハ敢テ實事ヲ論スル者ニ非スレ
テ其畢竟ヲ言フ時ハ「フルモサモ支那モ日本モ
特ニ之ヲ指シ言フニ非ス唯臆説及ヒ不定ノ論
理ヲ云フニ在リテ故ニ實際政治上ノ考究ハ敢
テ之ヲ問ハス真ニ法律上ノ論理ヲ以テ此問ニ
答フルレテ得ヘシ
又其問ノ答詞ノ為メ己レニ便益ヲ得ヘキ國ハ

其自カラ有セリト思ハル權ヲ行フニ付キ何程ノ
事ヲ為シ得ヘキヤヲ裁定スルハ相談人貴下ノ
任スレ所ニシテ「機會、義務、方便等ノ如キ諸件ハ相談
人貴下ノ獨リ其適意ニ裁定スヘキ者タリ然レ共此等
諸件ノ頗ル重大ノ事タルハ相談人貴下、敢テ
忘却ス可ラカレモノタル可シ

又右ノ問ハ既ニ万国公法上ノ定則ヲ遵守シタリト思
シタル者タルハ冗長ニ之ヲ論スヘキニ非ス唯野蕃ノ為
害ヲ蒙リタル國ノ言前ハ万国公法ニ反キタルヲナキ旨
ヲ決定センカ為メ古ノ規則ノ大畧ヲ此ニ掲載スルヲ要ス

國ノ產物トテ互換スルニ非レハ其無數無限ノ要需
ニ給スル能ハス又數百千里ノ洋海ノ為ノ互ニ隔絶シタル
ト雖モ唯些少ノ差支ニシテ敢テ之カ為カ互ニ交際ヲ結
ノ能ハスト為ス可キニ非ルハ智者ヲ待タヌシテ知レ可シ
蓋シ其洋海ハ即チ吾人ノ為ノ天帝ノ恩賜タル往來ノ大
路ニシテ吾人ハ僅カニ其洋海ニ航スルノ勞アルニ過キ
サルノニ是ニ因テ止ラ觀レハ各國互ニ妨害ナク洋海ヲ
用フルハ自然法ノ理ニ出ル所ナリ
太古及ヒ中世ハ勿論千八百年代ノ初メニ至ル迄モ
洋海ニ航スル者ハ天然避ク可カサル風波等

危難ノ外更ニ他ノ危難アリ而シテ其危難ハ人
ノ兇惡貪慾ノ情ニ出ルモノニシテ是レ即チ海
賊ノ為メ掠奪ニ逢フヲ指シ云フナリ
故ニ皆未海賊ノ為メ害ヲ被リシ開化各國ハ常
ニ之ヲ征討シ布照羅馬伊太利ノ諸共和國皆海
賊ヲ討チタリシガ是レ真ニ正々堂々ノ軍ニシ
テ凡ソ海上ノ戦闘常ニ皆斯クノ如クタルト甚
タ願ハシキ所ナリ又近世ニ至テモ海軍強盛ノ
各國ハ海賊ヲ誅滅ス可キ權アリト思ヒ而シテ
他ヨリ又取テ其權ナシト論スル者アラズ是レ

蓋シ其權ハ獨リ自國ノ民ヲ護スルノモニテラ
ズ他國ノ民ヲモ亦保護スルニ操レハナリ
最近新ノ世ニ至テハ海賊ヲ強悍ナル者皆誅セ
ラレ其殘黨僅カニ微々トシテ所々ニ潛ミ不善
ヲ為スニ過キス又更ニ往時ノ如キ危難ノ景狀
ニ復ス可キノ患ヤルナシ
然レニ若シ船ノ風波ニ逢ヒ或ハ其運轉ノ拙ナ
ルニ因リ蕃夷ノ住スル海岸ニ漂着シタル時其
船ハ毀滅セラレ其乗組人ハ或ハ殺害セラレ成
ハ停虜トセラレカ如キナラバ航海ノ安寧

之カ為ル猶ホタ全カラス其
細亞東方ノ開明各國ハ嘗テ其港ヲ鎖シテ外
國船ノ入ルヲ許サズ之ヲ以テ其權及ヒ其利
ナリト思ヒタレモ是レ蓋シ大ナル誤ト稱ス可
シ然レモ此等ノ各國ハ難風ニ逢フテ其海岸ニ
漂着セシ不幸ナル外國船ヲ過スルニ敢テ兇暴
ノ處置ヲ以テセズ其船ヲ扶ケ其危難ナリ出帆
スルヲ得ルニ至テ強テ出帆ヲ要メタルノニ唯
外國船ノ故ヲニ其國內ニ入り以テ杜門謝客ノ

國法ヲ強テ破ラシトスル者ハ兵ヲ以テ之ヲ
防制シタリ

然ルニ若シ之ト反シ此ニ一箇ノ島アリテ其島
人兇惡頑愚ニシテ自然法ノ何者タルヲ知ラス
人權ノ何者タルヲ解セズ難航ノ禍ニ罹リシ者
ヲ濫殺スト思儀「其宇内航海ノ為メ言アル
「海賊ニ比スルニ唯僅カニ些少ノ差アルモノ
ト決スベキヤ

予ハ之ニ答ヘテ曰ク「然リト而シテ此事ニ付テ
ハ敢テ里訥ヲ述フル者ナラバ「唯其困難ク

ルハ斯ノ自然ノ性法ト萬國「公法トニ背反ス
ル兇暴ノ行為ヲ抑制シテ之ヲ禁スル方法ヲ定
ムルニ在リ

予思ヘラク凡ソ如何ニ遠隔ノ國ト雖モ其船斯
クノ如キ凶暴ノ兇置ニ違フ時ハ其兇暴ナル島
人ヲ懲罰ス可キノ權アリテ而シテ其懲罰ヲ為
ス國ハ自カラ綿密ニ仁愛正義ノ道ヲ守ル可ク
又其兇暴ノ行ヲ為セシ本人ヲ罰スルハ甚々難
キカ故ニ其道ヲ守ル「殊ニ嚴ナル可シ
抑々仁愛ノ道ニ最モ適フテ而シテ之ヲ實際ニ施

スノ最モ難キ方法ハ人ヲ責メズ物ヲ以テ之ヲ
罰スルニ在リ(但シ犯罪ノ本人ヲ見出ス能ハサ
ル場合ナリト思フ可シ)
故ニ其國ノ司庫又ハ其國長ノ私財ヲ以テ海軍
能フ丈クハ貢ヲ出サシメ猶且ラサレハ人民ヲシ
ラ其貢ヲ出サシメ可ク亦是ト同時ニ海岸ノ城
若クは鐵ツツヲ思ハシ蓋シ又故ハ島人後ニ懲罰ヲ
受ルベアル時ニ方リ其城砦ニ挑ラ抵抗スルヲ恐
レアルニ因ル若シ又物ヲ以テ懲罰スルモ其効ナ
ク且其國ノ貧困ト天然ノ弊ハニヨリ已ムテ

得ス人ヲ懲罰スヘキ時ハ又船人ニ暴行ヲ加ルヲ
挑唆セシ首長ノミヲ懲罰スルヲ以テ正理ニ適フ
タルモノトシ且更ニ嚴密ニニ為サハ其首長ヲ助
タルモノヲモ亦懲罰スヘク如何ナル場所ニ於テ
モ老人婦女子等ノ如キ柔弱ニシテ罪トキ人
民ハ之ヲ罰ス可カラズ

假令人民中ノ強壯ナル者ノミヲ懲罰スルモ是亦
仁愛ト開化トノ道ニ反クモノニシテ若シ仮ニ一時
其地ニ植民シ又ハ永久ノ植民ヲ為シテ其地ヲ
開化セシムル方法ノ全ク施ス可カラサル時ニ非

サレハ懲罰ヲ用フ可カラス蓋シ植民ヲ為シテ
開化ニ趣カシムル方法ハ島人ト陸地ノ人トノ別
ナク今古開化ニタル強大國ノ野蛮ニ對シテ用ル
所ニシテ今ニ至テモ正理ト仁愛トノ着眼ニ於テ異論
最モ少ナキ方法トス。

是ニ因テ之ヲ觀ル一仮令開化國ヨリ右ノ野蛮ニ向ヒ
討索又ハ懲罰ノカス既ニ救回ニ及ビテ猶其功績ナク
且ツ近傍諸國ノ為メ危難ノ間斷ナキ時ト至ル前ニ記
スル方法ハ正當ノ者タルト敢テ疑ヲ容レサル所ナリ
然レモ同じ國ト其地ノ連接セシ野蠻地又ハ僅カニ

狭小ノ海邊ヲ隔ツル野蠻地ヲ他ノ國ヨリ開化
セシメント為ス時ハ難度更ニ大ナル可シ
今此ニ甲乙ノ二國アリ此二國共ニ前ニ記セルカ如
キ暴行ノ為メ多クハノ損害ヲ被リ然ル後其野
蠻ヲ開化セシメント為ス蓋計ノ度ニ付キ二國互ニ争
ヲ生スル下アルベク然ル時ハ此二國相合ニテ共ニ度ヲ計ル
甚々難ク(懲罰ノミヲ計ル時ハ二國合同ニタル
例甚稀ナリトセス)又如何ナル景況ニ於テモ右ニ
國相合ニテ共ニ度ヲ計ル時ハ征服ノ功績又ハ開化
ヲ勸ムル其權カヲ行フ方法ニ付キ終ニ必ス分争甚

藤ヲ生セシム可キカ故ニ右ニ國中現ニ其吏ヲ計シ
國ノモニ於テ諸吏皆己レニ擔當シ利害得失等悉
ク己レ一國ノ引受ト為スニ勉メサル可カラス

若シ又近傍ノ管係アル開化國中ニ其蠻島ト境ヲ接シ且地
勢及ヒ海湾ノ形状ニ因リ殊ニ以前ヨリ其蠻島ノ一部ヲ
所轄ト為シタルニ因リ仮令真ニ其權アルヲ唱フル能ハ
サルニ其利ヲ唱テ他國ニ先チ直チニ其野蠻ヲ開化セ
シムルノ業ニ取掛リ得可キ國アル時ハ更ニ他ノ近傍國
ヨリ預メ右ノ國ニ其業ニ取掛ラサルヤ否ノ旨ヲ問ヒ愈取
掛ラサルノ事ヲ得ルノ手續ヲ為スヘシ若シ之ヲ為サズ直チニ自

カラ其野蠻ヲ開化セシムルノ業ニ取掛ラハ即
チ右ノ國ニ對シテ交際上ノ禮ヲ失ヒ且治國ノ
術ニ於テモ一失策ヲ為スモノト云フベシ
斯クノ如キ失策アル時ハ其國ノ為メ一大ノ危
難ヲ生スベシ何トナレハ其國兵力ノ一分ヲ蠻
夷追討ニ用ヒシ後全カヲ保チタル強大國ニ向
ヒ亦其兵カヲ用フ可キノ恐アレハナリ
而シテ其強大國ハ縱令真ノ權理サシト雖モ語ヲ
巧ニシテ言ハン曰ク自國ト顔顔ス可キカアル
國ノ來テ蠻地ニ據リ自國ト境ヲ接スル時ハ

愚ナル野蠻ト境ヲ接スルモ比スレハ自國ノ為
メ危難甚々大ナリト而シテ殊ニ前文ニ記セシ如ク
其強大國既ニ以前ヨリ確定ノ威權ヲ以テ其蠻
地ノ一部分ヲ管轄セシト思倣サハ其口實更ニ
理アルカ如キ貌ヲ為スベシ
然ルニ若シ其最接近ノ強大國敢テ手ヲ下サズ
且ツ野蠻ヲ開化セシムル圖計ノ必要タルト
ニ付キ其野蠻ノ為メ損害ヲ被リシ國ヨ
リ相談ヲ受ケタルニ之ニ答ヘテ自カ
ク一國ノミノカラテ以テ其圖計ヲ為サズ又

其損害ヲ被リシ國ト合シテ其圖計ヲ為サハ且
ツ其損害ヲ被リシ國ノ處為ニ抗セサルベシト
言フ時ハ其損害ヲ被リシ國ニ於テ自カラ其圖
計ヲ行フノ正理アルト敢テ疑テ容ルヘカラス
而メ其國ニ於テ其圖計ヲ為シ遂ケタル時ハ萬
國公法上ニ允許スル各種ノ方法ノ以テ其功績
ヲ全クスルノ權アルト明カナリ
若シ又蠻地ニ最接近ノ甲國野蠻ヲ為メ害ヲ被
リシ乙國ヨリ相談ヲ受ケタルニ自カラ其野蠻
ノ開化セシムルト肯セス而メ又其損害ヲ被

リシ乙國ノ其事ヲ為スヲ肯セサル時ハ乙國ハ
自國人民ノ航海ノ安寧ナラシムヘキ已ムヲ得
ナル事情ニ於テ自カラ其事ヲ為スノ推ヲ得
可シ蓋シ此時ニ方リテハ乙國ハ縱令同時ニ
起リ来ラストモ相續テ起ルベキニ箇ソ戦ヲ
為スヲ覺悟シ自國ノ兵力ヲ檢視セサル可カラ
ス

然ル時ハ乙國ニ其正理アリテ他ノ各國モ皆乙
國ヲ同意ニ多分ハ其圖計終ニカク奏スルニ至
ルベシ然レトモ兵ヲ以テ勝敗ヲ決スルニ至テハ

正理ノ者ト雖モ敗歟ノ免ル、能ハス例ヘハ其
兵ヲ動カスニ機會ヲ誤ツカヨキハ忍テ敗ヲ取
ルノ微ニシテ古今史ニ就キ之ヲ觀ル時ハ正
義アル者ニ敗セシ例甚々寡トカラス因テ予
等ハ此類ノ例更ニ増シ終ニ邪者ヲ跋扈セシメ
正者ヲ寒心セシムルノ害ナカラシムヲ希望ス

千八百七十四年六月廿六日江戸ニ於テ

ボワソンナードド、ランタラビー

